



TITLE:

吉田城先生の思い出 (吉田城先生追悼特別号) -- (思い出)

AUTHOR(S):

山上, 浩嗣

---

CITATION:

山上, 浩嗣. 吉田城先生の思い出 (吉田城先生追悼特別号) -- (思い出). 仏文研究 2006, S: 429-436

ISSUE DATE:

2006-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138025>

RIGHT:

## 吉田城先生の思い出

山 上 浩 嗣 Hirotsugu YAMAJI

吉田城先生に初めて教わったのは、1987年、私が文学部の二回生のときだった。翌年仏文科——という名称は正確ではないことは承知しているが、今も昔もあの研究室と共同体は私にとって「京大仏文科」である——に進学してから、卒業後一年間聴講生として在籍した時期を含めて、大学院進学のために京都を去るまでの日々の記憶のあちこちに、吉田先生が登場する。その映像は、その他の多くのくすんだ場面とは異なり、白や黄や赤といった明るい色彩を放っていて、思い起こすたびに今も晴朗な気分になる。厳しさと思いやり、真剣さとユーモアとを兼ね備えた先生は、学生たちを容赦ない光で照らし、滋養を与え続ける太陽のような存在だった。私は先生の話に笑い、落ち込み、励まされた。私が研究者になりたいという困難な夢を抱き、それを志そうという思いを固めたのは、吉田先生という人格に接したからにほかならない。先生はそのような存在の魅力に満ちあふれていた。

先生から初めて受けた授業は、「フランス文学史講義」というような題目で、主に19、20世紀の作品の概説だった。私は悪い仲間たちと教室（文学部旧館一階の大教室だった）の後方に陣取り、先生の話に聴くともなしに耳を傾けていた。ブルーストについて言及があったはずだが、どういうわけか記憶がない。私は当時吉田先生が高名なブルースト研究者であることも知らなかったので、その部分は聞き流したのかもしれない。この授業では唯一、ボードレールのいくつかの詩についての解説が印象的だったのを覚えている。期末試験の解答用紙の末尾に、小さなアンケートが置かれていた。「あなたはこの試験のためにどの程度勉強したか」「あなたはこの試験でどんな成績を望むか」というような問いに対して、それぞれ三つの項目から答を選択させるというものだ。一番目の問いには、「1. 講義にまじめに出席し、試験にも準備万端で臨んだ。2. 一週間程度は勉強した。3. 一夜漬けのみ」、二番目の問いには「1. 優を望む。2. 良はほしい。3. 可で御の字」（この「御の字」という表現はよく覚えている）というような選択肢が設けられていた。私は授業での様子から、先生が謹厳なかただとばかり思っていたので、これにはかなり面食らった。正直に答えて気分を悪くされないか、といって嘘をついても答案を見れば簡単にバレてしまう。結局先生の真意をはかりかねてどちらも2を選んだ（と思うが、

実際の成績はどうだったか覚えていない)。

三回生になり、仏文科に進学した。フランス語もできず、ろくに本も読んでいなかった私がこのような選択を行うに至ったのは、一回生のときに受けた廣田正義先生の文法の授業(教科書に出てきたデカルト『方法序説』の冒頭の一節に優に一時間ほどの解説を加えられ、驚嘆した)と、二回生のときの田口紀子先生の講読の授業(毎回教科書の訳文を丁寧に添削してくださった)がきっかけとなっている。進学後は迷わず吉田先生の講読の授業を選んだ。今度はまじめに取り組もうと思った。授業が始まると、大学院生や、学外のフランス文学愛好家といった多士済々が集う教室に自分がいるという事実それ自体に高揚感を覚えた。だが、講読の進度が私にはあまりにも速すぎた。プレイアッド版で毎回4～5ページは進んでいたのではないかと記憶する。ブルーストについて卒論を書く決めていた同級生は、自分でも吉田先生の授業に合わせて『失われた時を求めて』を読んでいくと宣言し、それを実行していたが、私は早くも数回目の授業で息切れし、以後は予習をあきらめた。

吉田先生は授業で、博士課程の学生であれ、三回生の学生であれ(二回生もいたかもしれない)、発表の準備が不十分であると判断されれば、容赦なく叱責した。逆にどれほど見事な朗読を行っても、どれほど的確な訳文を付けても、とくに褒めたりねぎらったりされることはなかった。私などは先輩たちの発表を聞いて、とてもこんなふうにはできないとひとり冷や汗をかいていたが、まわりの出席者はそれを当然のように受け止めているように見受けられた。だから、担当を指名された箇所については、真剣に準備して発表に臨んだ。とにかく無事に済ませること、これだけが目標だった。その部分を筆写し、どこに行くにももち歩いて音読の練習をした。そこに含まれていた接続法の用法が理解できず、当時通い始めた日仏学館のフランス人の先生に質問したりもした(が、明確な答は得られなかった)。発表のとき、音読では張り切りすぎてよけいなところをリエゾンしたはずだが、それについてはおとがめがなかった。訳文の作成に際し、既訳を参考にはしたが、それでも自分なりの工夫はほどこしたつもりだった。吉田先生は、私の発表を聞いて、「今 « *demi-mondaine* » を『裏社交界の』と訳しましたが…」というように解説された。それが問題だという趣旨ではなかったが、そこが井上究一郎訳と一致していたため、参照したことはわかっているぞというサインであるかのような気がして心外だったのを覚えている(今では、先生にとってはそんなことはどうでもよかつただろうとわかるが)。

とにかくそんな調子だったので、私には当時この『スワン家のほうへ』がど

んな物語なのかも理解できていなかったし、登場人物の関係すらもよくわかっていなかった。のちに自分で読み返すうちに、ふとこの授業のことが思い出されて、なるほど先生があのとのおっしゃっていたのはこういうことだったのかと得心がいくことが何度もあった。パドヴァのスクロヴェーニ礼拝堂を訪れたとき、ジョットの壁画のなかの寓意像を眺めていて、たしかこの「慈悲」の絵のコピーを吉田先生の授業で見たことがあるはずだと思いついて、問題の一節をあとで探したことがあった。それ以後この絵も、物語のこの部分も、とても印象深く記憶に残っている。

三回生の終わりごろ、卒論についてまだ何の展望もないときに、何かの宴会の席で、吉田先生から「君は卒論は何について書くの」と尋ねられて、まだ決まってませんとは言えず、おそろおそろ「ソシュールにしようかと考えています」と答えたところ、先生は「それはいいね、大歓迎だよ」とおっしゃった。私はこの一言で心を決めた。このころ同時に大学院に進む意志を固めた私は、ことあるごとに仏文研究室を訪ねるようになった。卒論執筆に際しては、当時助手をされていた田口先生に、最初から最後まで懇切丁寧なご指導を受けた。私はあつかましくも、一章書き上がるたびに添削を求めた。田口先生は、乱雑な手書きの草稿をいやな顔ひとつせず丁寧に見てくださった。しかし、卒論の相談のためというのは研究室を訪れる口実で、そこに集う先生方や友人たちの輪に加わりたかったというのが本当だったと、今にして思う。当時この研究室は私の心のよりどころだった。

もっともよく相談（や雑談）に乗ってくださったのは田口先生だが、吉田先生もよく部屋に来られて、横から会話に加わられた。またこんなところで油を売っているのかというような調子で冷やかされるのだが、その声は温かく響いた。吉田先生は、ここでは一切堅苦しい話をされなかった。話題は、他人のうわさ話や昨夜見たテレビ番組についてなど、他愛のないことがらがほとんどだった。学生の私生活についても、かなり直接的に質問されることがあった。教室とはまた異なった先生の姿を見て、私たち学生は親しみを覚えるようになり、こちらからも相当ぶしつけな質問を浴びせたりもした。そんなとき先生は、たいてい照れたような笑いを浮かべて話をはぐらかされた。勉強を怠ける者には厳格この上なかった先生だが、このような失礼についてはすこぶる寛容だった。

先生はまた、大学院進学を志望する私たちに、これから研究者として身を立てるようになるまでに通過しなければならない困難についてよく話された。しかしそれは、私たちの未熟と不勉強とを責めるためというよりは、今後の試験

に向かっていく覚悟を促すためであったように思う。なかなか思うように進まない卒論を前にして気弱になっていた私は、これによってかえって励まされた。理想の将来像は身近にあった。当時仏文科で授業を担当されていた先生方は、どなたも研究者としてだけではなく、人間的な魅力にあふれていた。いずれは私もこんなふうになりたいと切望するようになった。

吉田先生が深刻なご病気を抱えておられるという話を聞いたのもこのころだった。週に何回も病院に通って、治療を続けておられるという。しかしその口吻にまったく暗いところはなかったし、会えばいつも軽快な冗談を飛ばしておられたので、私も友人たちも、それほど心配はしていなかった。この当時からすでに先生が苛烈な闘病生活を送っておられたことを知るのには、ずっと後年になってからである。「ぼくはね、いつ死んでもおかしくないんですよ」との先生の言葉は、冗談として受け止めたものだったが、今にして思えば、わざと軽口に響くように語られていたのだ。先生が苦痛を人前で告げることは決してなかった。

なんとか卒論を書き上げ、口頭試問に臨んだ日のことは忘れられない。吉田先生の前には、小さな文字が連なったルーズリーフの山が置かれていた。机越しに、それが卒論一編一編についての先生のコメントであることがわかった。こんなに丁寧に読んでくださるものなのかと感激したが、次の瞬間にそれは不安へと転じた。きっと多くの不都合を指摘されるにちがいない、と。仏文科の卒論審査は、非情なまでに厳格であるとうわさがあった。かつて何人もの学生が追いつめられて泣き出したという話も聞いていた。私は緊張と恐怖をぬぐい去ることができなかった。最初に中川久定先生から、口頭で論文を要約するように指示されたが、そのときにはすでに頭が真っ白だった。しどろもどろになりながら答えたが、自分でも何が言いたいかわからなかった。先生方から評価をうかがう場面になり、私は身構えた。だが、意外にも飛び出した言葉は好意的であった。吉田先生は、「丸山圭三郎の説に依存しすぎるなど、いくつかの問題点はあるとはいえ、きちんと原文を読み、丁寧な分析を行っていて、文章も正確である。全体として高く評価している。大学院入試にはしっかり準備して臨むこと」とのご講評をくださった。先生からお褒めの言葉をいただいたのは、後にも先にもこれきりである。

しかし私は、大学院入試には、一次試験で不合格になった。予想されたこととはいえ、私はかなり落胆した。聴講生として大学に残り、もう一度勉強をやり直すことにしたが、何から手をつけたらいいのかわからなかった。もう一度卒論に相当する論文を書いてみなさいという助言をくださったのが、吉田先生

である。私はそこで、以前から関心があったミシェル・フーコーの『言葉と物』に取り組んでみることにした。

この一年間は、心を入れ替えて勉強に励んだ。ジャン＝ポール・オノレ先生のディセルタシオンの授業のとき以外は、ほとんど毎日一日中国書館にいて、フーコーの本と取り組んだ。今でも真っ黒になった原書を取り出してくると、あのときのさまざまな思いがこみ上げてきて、胸が痛くなる。何の気がかりもなく勉強に打ち込める時期は、実はそれほど長くない。大学院入試に失敗したことで、私は貴重な経験ができた。ときおり先の不安にとりつかれても、目標を共有する仲間がいたし、研究室に行けば、どんと構えて、君の悩みなど悩みとは言えないと笑い飛ばしてくれる吉田先生がいた。つくづく私は恵まれていた。

この年（1990年）の初夏のころ、セリーヌの研究で名高いアンリ・ゴダール先生が来日されて、しばらく京都に滞在された。吉田先生は、当時修士課程一年だった田中尚史君と私に、ゴダール先生が紀南地方を二泊三日で旅するのに同行しないかと提案された。旅費の一部はこちらでもつとおっしゃる。田中君とは違い、私は厳密に言うと研究室の構成員ではなく、一卒業生に過ぎなかった。旅行に出かけられることもさることながら、吉田先生が示してくださった信頼が何よりもうれしかった。

二度目の大学院受験の際には、稚拙ながら苦勞して仕上げたフーコーに関する小論を提出した。今度は前年に出した卒論ほどの評価は得られなかったが、大学院には無事合格した。だが、私は結局ここで京都を離れることになる。深い考えもなしに受験していた東大駒場の大学院から、思いがけず合格通知が届き、迷いに迷った末、東京行きを決断したのだ。この選択に際しては、吉田先生のご助言を得られなかった。先生はちょうど一年間の予定でフランスに出かけられており、この時期にお目にかかれなかったからだ。私は先生にお別れを告げることもなく、引越してしまった。今でもこのことが心残りになっている。先生に背中を押してもらいたいという気持ちがあった。

ブルースト研究者でも19・20世紀文学研究者でもない私は、研究の上で吉田先生から直接の教えを授かったわけではない。予習も怠けがちで、『失われた時』を日本語でさえ通読したことがなかった私に、そのおもしろさを理解できるわけがなかった。また、ときおり先生がご自身の研究について話されることがあっても、私には生成研究という手法の価値がどれほどのものかわからなかったし、たとえそれに価値があるとしても、そんな精密な方法にどんな意義

があるのが理解できなかった。それに、このころからすでに先生は世界的なブルースト研究者として名を知られていたにせよ、私にはとにかくすごい先生に教わっているのだという漠とした認識しかなく、今からすればその傑出ぶりを本当には理解していなかったと思う。しかし、それであればこそ、吉田先生は私にとって兄貴分のような親しい存在であった。

後年、大学院の授業であらためてブルーストに接したり、パリ留学中に気晴らしのために『失われた時』を読んだりすることでそのおもしろさを知るようになったし、教壇に立つようになってからは、授業でときおりブルーストのテクストを教材として取り上げたりもするようになった。大学院で曲がりなりにもパスカル研究を志すようになり、草稿研究という方法の委細とその文献学的な意義と重要性も理解するようになった。そして、研究を継続的に発表していくことの困難を身をもって知るようになるにつけ、吉田先生のとてつもない業績について真の意味で畏敬を抱くようになった。しかし、そのようにさまざまなことがわかってきてからは、かえって先生の放つ光がまぶしすぎるように感じられるようになり、物理的な距離もあったが、それ以上に心情的な距離を無意識のうちに置くようになっていた。

実は昨年（2005年）の前期、私は京大で一・二年生向けのフランス語の授業を受けもっていて、週に一度は旧教養部のキャンパスに足を運んでいた。いや、それ以前にも、ある研究会に出席するために、二週間に一度は近衛通りの楽友会館を訪れていた。にもかかわらず私は、旧館跡地にそびえ立つ文学部棟（というよりも塔だ）に足を向けることは一度もなかった。かつてあれほど入り浸っていた仏文研究室の敷居が高く感じられていたのだ。もっとも、そのことを明確に意識していたわけではないし、そもそも用もないのに突然押し掛けても迷惑になるだけなので、立ち寄ることを避けたのは当然だとも言える。事実私は自分にそのように言い訳していたと思う。しかし、留学を終え、教壇に立つようになってから何年も経っているのに特段の研究成果も出せずにいるわが身をふりかえると、吉田先生に合わせる顔がないというのが本当のところだった。

先生の訃報を受け取ったのは、ちょうどそんな折りだった。私はしばらく茫然とするばかりで、次の行動に移ることができなかった。悲しみというような明確な感情のせいではない。その前に、「吉田先生が亡くなった」という文の意味は理解できても、その文が指す事態が実感として伝わってこなかった。聞けば、その年度は初めから授業を担当されず、病院で治療に専念されていたという。私はそんなことも知らなかった。私が伝言を頼まれた東京の先生方の反

応も同じようなものだったと思う。みな一様に絶句され、あとは事務的な最小限のやりとりを終えると、すぐに受話器を置かれた。

先生が亡くなってしばらく経った8月のある日、北川美香さんと小関武史君の発案で、田口先生、増田真先生、永盛克也さんを中心に、吉田先生を偲ぶ会をごく少数の仲間でもつことができた。田口先生が、吉田先生の研究室にみんなを通してくださった。先生がここを最後に去られたときのままの状態だという。田口先生は、亡くなるまでの数カ月間の吉田先生のご様子を詳しくお伝えくださったのだが、一方でそのとき私たちがいた場所では、書物や書類があたかもさきほどまで読まれていたかのように机の上に置かれていて、今すぐにも部屋の主が戻ってきそうな雰囲気だったので、今話題にしているその人の部屋に自分がいるのだとは、とうてい信じられない思いがした。

話の途中で、私が大学院に入学した年の夏に、パリに滞在しておられた吉田先生のもとを訪ねたことを思い出した。私はそのときもはや京大の学生ではなかったが、先生はそれまでとまったく変わらない様子で迎えてくださった。吉田先生は、奥様の典子さんの運転する車で、ポール＝ロワイヤル＝デ＝シャンに行こうと誘ってくださった。私がフーコーの古典主義時代の記述に啓発を受け、この時代の思想の勉強を志すようになったと告げたことに対する配慮だった。人気のない田園地帯の修道院跡の空気は澄んでいて、芝生の緑が目には鮮やかだったことをはっきりと覚えている。先生はその芝生の上に腰をかけて、幼い娘さんを見ながら、「昔はどんなことにも好奇心をもって、どこにでも行ってみようとしたもんだよ」とつぶやいた。私はこの言葉の意図をはかりかねて黙っていたが、今思えば、ご病気を意識して不自由を感じておられたのかもしれない。

そんなことを思い出していると、小関君がちょうどその夏に撮ったという吉田先生の写真を取り出してきた。見るとそれは、まさに私の記憶のなかの先生だった。このときの吉田先生は、おおむね今の私の年齢だった。いつも颯爽としていて、快活で冗談好きで、つねに研究室をもり立てようとしていて、研究の厳しさと喜びとをたえず口にされていた。今耳にしている吉田先生の悲痛なご様子は、何か遠い世界の物語のように響いた。

先生からいただく年賀状には、いつも「努力あるのみ」というような簡潔な激励の言葉だけが記されてあった。つらさや痛みを人一倍引き受けておられながら、それをおくびにも出さずに研究に身を入れられていた先生ご自身の、これが真意だったのだと、今さらにして思う。泣き言や怠けるための言い訳ばか



り探して、先生に救いを求めようとしていた自分がいかに不甲斐なく思われる。先生に身近でご指導いただいた時期はわずかだったが、本当に多くのものを先生から授かった。今はそのことに感謝するばかりである。

(やまじょう・ひろつぐ 関西学院大学助教授)